

BOOK REVIEW

いのちなき砂のかなしさよさらさらと 握れば指のあひだより落つ (石川啄木)

『土と生命の46億年史 土と進化の謎に迫る』〜 20a新ゴM (以下同)

藤井 一至 著

「いのちなき砂」とは文学的には許される表現であるが、生物学者であれば砂に付着している何らかの微生物を見出すに違いない。中央アジアから偏西風によって東方に運ばれる黄砂などは、「微生物の箱舟」と呼ばれることさえあるくらいだ。

プロメテウスは粘土からヒトを造った。また農業とはいわず趣味の園芸程度の実践者でさえ、土の大切さは強調するところである。土が生命の源であるという考え方はそれなりに納得されるが、しかし「土とは何か？」と改めて問われると、一言で答えるのは難しい。土の研究者である本書の著者によれば、「土とは岩石が崩壊して生成した砂や粘土と生物遺体に由来する腐植の混合物」と定義されるものらしい。厳密に言えばそれらの粒子の隙間に存在する空気およびそこに入り込む水（もしあれば）が、土の構成成分ということになる。砂と粘土の違いは粒径の違い（両者の間にシルト＝siltがある）だそうで、粘土は粒径が2μm以下、砂は粘土より大きく、粒径2mm以下で、それより大きいと石礫と分類されるという。われわれ素人が土に抱いているイメージが簡潔明瞭に表現されている。しかしこの定義にしたがうなら、地球に生物が誕生しその一部が死滅するまで、地球に土はなかったということになる。大雑把な言いようになるが、地球に生命が誕生して40億年であり、その地球が誕生したのが46億年前である。生命誕生後の進化と絶滅に関しては、多くの書籍や博物展示などでお馴染みであるが、無生物から生物すなわち「自己複製能力のあるアミノ酸の集合体」への飛躍がどのように起きたのかは興味深い。岩石と砂と

粘土、そして水中に溶け込んだアミノ酸やリン酸などの非生命物質群が、どこやらの場所で一定の範囲の濃度比をもって滞在し、そこにエネルギー（たとえばカミナリ）が付加されるなど諸々の条件が重なることで、生命体に変化したということだろうか。今のところ定説はない。

そこで粘土の働きが注目された。粘土の本質は結晶構造をもつ鉱物であって規則性、秩序があり、条件さえ整えば同じ鉱物が再生されるという。そして自らを再生し情報を伝達できる物質は、自然界では（現在のところ）粘土と遺伝子しか見つかっていないという。

海（おそらくは）泥濘の中で40億年前に誕生した生命は、考え得るすべての方向に分化・進化し、そのうちの一部のものは生き延びることができた。さらにその一部はやがて陸上に進出することとなった。まずは5億年前に植物、そして1億年遅れて動物である。気の遠くなるような年月であるが、生物が存在することによって、陸地にも「土」が産まれた。ミミズ、ムカデ、ヤスデ、クモなどが、最初に地上に出現し、現在まで生き延びてきた動物たち（著者は「花の4億年組」と呼んでいる一矢）である。

そしてさらに1億年遅れて、ゴキブリ、シロアリらの昆虫が出現した。

こうしてみると恐竜達の哺乳類だの、とくにホモ・サピエンス（＝現存人類）など地球においてはまったくの新参者であるとしかえいえないが、ホモ・サピエンスはその生存エネルギーのほとんどを土に依存しながら、その持続可能性に関する配慮はいささか心もとない。

「現在、人類は世界の食料の95〜99%を直接的・間接的に土に依存」しており、「残りの1〜5%は海に由来する」と著者は述べている。言われて気づいたが、魚食する霊長類というのは、ほかに例がないように思う。かなり特殊な食生活だ。しかし海産の食料も突き詰めれば土に依存している。主要な植物プランクトンである珪藻は陸地からのケイ素（二酸化ケイ素）の供給量でその繁殖が規定されるからである。

土（陸）と海と空とそこに存在する生命体との間には延々と続く、「決して定常状態ではない」物質循環が存在する。地質学とか宇宙学などをやっている人たちはとにかく時間スケールが大きい、その長大なスケールで「人類の繁栄と衰退のリスク」を知るのが、本書の目的の一つであると著者は述べている。しかし本書で語られているのは人類だけに留まらない。細菌から大型哺乳類まで、地球上に存在する、あるいはかつて存在した、生物群の栄枯盛衰を物質循環とそのキープレーヤである土との関係で、広範囲に論じた快著である。一読を強くお勧めする。

福家 伸夫 (東京大学総合医療センター) 10a新ゴL

挨拶の口上でしか聞かないのは惜しい

『物語として読む全訳論語 決定版』

山田 史生 著

ある大型書店で開催された「独特で面白い出版社フェア」は、聞いたことがない出版社が多く出展し、確かに面白かった。そこで手に取ったうちの一冊が本書である。誰もが知る『論語』は漢字文化圏に生まれたなら読んでいて当たり前の、2000年前からある古典である。しかし恥ずかしながら通読した覚えがなく、今さらながら読んでみようという気になった。孔子が弟子たちに語った言葉「子曰く、なんとやら」が集められた、儒教の経典である。はるか大昔から今も、解説書が数多く出版されている。つまり、過去の歴史的遺物ではなく、現代も読み続けられている。

本書の構成は、現代語訳と漢文の書き下し文の後に、噛み砕いた解説が続く。この形式は定番の解説書と変わらない。ところが本書の解説では「一般的な解釈はこうだが、自分はそうは思わない。孔子はこんなことを考えて、こんな意味で言ったんじゃないかなあ」と、背景や状況をふまえた著者独自の見解を披露している。そして、孔子を雲の上の聖人君子ではなく、人間味あふれた生身の人として描いている。俳優ロバート・デ・ニロは心で泣いて顔で笑うひくひくした作り笑いが得意だが、そんな孔子の顔が思い浮かぶ。漫画ではないのだが、漫画的なノリがいい。もちろん、ウケ狙いでふざけるのではなく、真面目に解釈している。ついでに著者の身の回りについてのばやきも含むので、随筆でもある。本書は575ページで厚さ3.2cmもあるのだが、にんまり愉快地笑えるので、読んでしまえる。これまで『論語』に挑戦したが挫折したことがあっても、本書なら読

了できるだろう。前書きによると著者自身も楽しく書いたとのこと、その楽しさが読者にも伝わってくる。書評者が知らなかっただけで、独自の視点で斬り込んだユニークな『論語』解説書はほかにもたくさんあるらしい。本国である中国でも日本でも、徹底的に読み尽くされているのだろう。

著者は大学の教官で、学生指導に苦勞する視点での解釈が随所に現れる。私たちも、学生や研修医の指導に悩むことがある。そこでつまづいたときにも、孔子の言葉が思い浮かぶかもしれない。もちろん『論語』は困難な場面別の対処法を示す実用書ではなく、人として生きる道を説いた、心の持ち方の指南書なのだ。「温故知新」「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」など、聞き慣れた言葉がいくつも出てくる。これらは、元々は単独の語句ではなく、文章の中の一部である。特に本書は、これまでばらばらで前後の脈絡はないとされてきた『論語』の各章を、一続きの物語としてとらえようとしているらしい。初学者の書評者はその著者の試みにまんまとはまったようで、物語として違和感なく読んだ。

『論語』は、現在の中国や韓国におい

てどんな位置付けなのだろう。また、欧米ではどれほど読まれてきたのだろう。朝起きてから夜寝るまで、すべての時間を『論語』の教えどおりに生きられたら、それこそ聖人君子である。それは無理でも、少しでも多くの場面で孔子の言葉を思い出せたら、まともな人に近づけようである。そこで気がついた。夜寝る前に読んで腑に落ちて翌朝にはすっかり忘れていたので、朝の仕事の準備が済んで患者に接する前や、お昼や午後の一服の際に、ちらりと一文だけ読むのがいいのではないかと。ほんのり『論語』色に染まった頭で仕事すると、わずかでも孔子に近づけるかもしれない。

書店には今、あらゆる専門書の棚に「もう一度学ぶ」「面白くて眠れなくなる」などの題がついた一般向けの解説書が並ぶ。物理や数学といった理系から、歴史や哲学や宗教などの文系や、美術や音楽などの芸術の分野でも揃っている。本書もその一つで、いい時代である。「興味があったけど縁がなかった」「いつか読みたいと思っていたけど手が伸びなかった」世界への扉が開いている。いくら歳を重ねても、世の中は知らないことのほうが圧倒的に多い。そういえば『論語』にも、そんなソクラテスの「無知の知」と同じことが書かれていた。本を開くことができる暮らしが、どれほど恵まれていて幸せなことか。ほんの80年前の日本もそうだし、今も、食べ物がなかったり、ミサイルが飛んできて一瞬で命を失ったりすることに怯える人がいる。

水谷 光 (市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室)

BOOK REVIEW

流用

戦後80年④ 人生勉強の演習帳

80%+20%

『昭和20年8月15日 文化人たちは玉音放送をどう聞いたか』

長体 80%

中川 右介 著

1945年4月12日、海軍の資金で製作された長編アニメーション映画『桃太郎 海の神兵』の封切り日、客席には当時16歳、大阪府立北野中学を卒業したばかりの手塚治虫がいた。マンガ少年は夢を抱く。「一生に一本でもいい、ぼくの絵を、ぼく自身が映画にできたらなあ」。

1945年8月15日、手塚は兵庫県宝塚市にある自宅で、マンガを描きながら「玉音放送」を聞いた。「ぼくは、とっさに、こりゃ、もしかしたら漫画家になれるかもしれんぞ」。

この日以降、夢に向かって突き進む。1945年の秋、『少国民新聞』（現・毎日小学生新聞）にマンガを売り込む（おそらく『マアチャンの日記帳』か）。伝説のマンガ『新宝島』が発売されるのは1947年だ。

以上のネタは、本書から得ている。本書は、手塚をはじめ玉音放送を聞いた文化人の、正確に言えば、作家やマンガ家、映画人、演劇人、音楽家といった文化・芸能の分野の著名人、その数135人を、自伝・評伝や回想録、日記、証言などの資料から収集したアンソロジーである。

筆者の中川右介の書は今回初めて読む。経歴によれば、戦後日本文化を、クラシック音楽、映画、マンガ、推理小説など多様な分野で掘り起こし、すでに幾冊もの書をものした、実績を誇る作家・編集者である。

本書を手にしたのは、かつて読んだ大江健三郎の玉音放送体験がずっと記憶に残っていたことがある。本書にも当然収録されている。愛媛県喜多郡大瀬村に暮らす小学5年生は、ある屋敷で耳にする。「ラジオは天皇の言葉を、それもあきらかに人間が語るそれをつたえたのである。私には聞きなれぬ奇妙な抑揚だった



が、それが人間の声であることは確かだった。誇張した言い方になるが、大江は聖俗革命の瞬間に立ち会ったのである。では、国民は、本書は文化人だが、どんな風に受け止めたか。本書はその関心に存分に答えてくれている。千差万別、反応は一人ひとり違っていると云っていい。安堵、開放感、不安、絶望、怒り、茫然、新たなスタートの覚悟、日本の再生を誓う、まるで他所事のように無関心の者もいる。

スミタ

私が最も知りたかったのは、戦意高揚に積極的に協力した人たちの反応である。大陸を視察する「ペン部隊」の一員として、『日本文学報告会』の議長として、『大日本映画製作株式会社』（大映）の社長として国策に協力した菊池寛。しかし、玉音放送を聞いた彼が何を思ったか、証言も書かれたものも「確認できない」。菊池に劣らず、戦意高揚に貢献した林芙美子についても直接の記録はない。作曲家の古関裕而については評伝が紹介されている。そこには「みづからが軍歌の作曲者であったことも、いささか気にならないではなかった」と記されている。私としてはもう少し切り込んでほしかったのだが、無理な注文か。基本的にどう受け止めたかの記録に徹し、批判的言質を労することはない。

戦後80年だ。取り上げられている文化人のほとんどは鬼籍に入っている、しかし芸術・文化は長しである。若者であってもなじみのある名前がずらりとならぶ。目についた人物からつまんでいけばいい。

29e

社会が180度転換する。本書がスポットライトを当てるのは、崖っぷちに立たされた人間の嘘偽りのない本音である。確かに過去の出来事であるが、いざというとき、誰でも人間の度量が試される。その意味では、本書は135人もの多数の人間から学ぶ人生勉強の演習帳であると言ってい

ドキュメンタリやドラマで、皇居の前で涙する軍人や庶民の映像を見た人もあろう。しかし、あれは前日に撮られた写真がもとになっており、ヤラセだったとか。米軍が戦後処理の拠点として使用することを想定して、皇居やその周辺の大劇場は空襲の対象から外したとか。そうした思わぬエピソードが本書の彩を豊かにしている。

筆者は、「はじめに」で「タイムマシンに乗って、1945年8月15日へ旅した気分になっていただきたい」と旅雑誌のようにみなしている。しかし、半藤一利が「日本のいちばん長い日」と特別に呼んだ日である。そんな気軽な気分で読めないと思われるが、いろいろな思いが去来するのは確かである。私の胸をついたのは、ふたたび手塚治虫になるが、玉音放送日の夜の出来事である。大阪の梅田まで電車で出かけた彼が発した言葉。「おお、大阪の街に灯がついている！」。灯火管制が解かれ、平和になったことを確信する。まさに今私たちが平和な時代を生きている喜びを改めてひしひしと感じたのである。

関本 英太郎